

一九八四年  
Nineteen Eighty-Four

ジョージ・オーウェル\*<sup>1</sup> 訳：山形浩生\*<sup>2\*3</sup>

2018年1月9日

\*<sup>1</sup>著作権は日本では消失

\*<sup>2</sup><http://cruel.org/>

\*<sup>3</sup>©2015 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 - 継承 4.0 国際



# 目次

第 I 部 zw	1
第 1 章	3
第 2 章	13
第 3 章	19
第 4 章	25
第 5 章	31
第 II 部 zw	35
第 III 部 zw	37



## 第 I 部



## 第1章

四月の晴れた寒い日で、時計がどれも十三時を打っていた。ウィンストン・スミスは、嫌な風を逃れようとしてあごを胸に埋めたまま、勝利マンションのガラス戸を急いですりぬけたが、ほこりっぽいむじ風がいっしょに入ってくるのを防げるほどは素早くなかった。

廊下は茹でキャベツと古いぼろマットのようなにおいがした。片方のつきあたりに画鋏で張られたカラーポスターは、屋内用には大きすぎた。描かれているのは、幅一メートル以上ある巨大な顔だけ。四十五歳くらいの男の顔で、濃く黒い口ひげと、頑強そうでハンサムな顔立ちだ。ウィンストンは階段に向かった。エレベータを使おうとしても無駄だ。調子がいいときでも滅多に動かなかったし、今は昼間には電気が切られていた。憎悪週間に向けた準備のために経済キャンペーンの一環だ。アパートは七階にあったので、三十九歳で右のかかとの上に静脈瘤の潰瘍があったウィンストンは、ゆっくりと階段をのぼり、途中で何度か休憩した。エレベータシャフトの向かいにある踊り場ごとに、あの巨大な顔のポスターが壁から見つめていた。実に人為的で、こちらが動くとその視線が追いかけてくるような気がする類の絵だ。「ビッグ・ブラザーは見ている」とポスター下の標語に書かれている。

アパートの中では甘ったるい声が鋳鉄の生産がらみの一連の数字を読み上げていた。その声は、曇った鏡のような長方形の金属版から流れている。右手の壁面の一部となっている金属板だ。ウィンストンがスイッチをひねると、声は多少小さくなったが、まだことばは聞き取れた。その装置（テレスクリーンと呼ばれる）は暗くはできても、完全に切ることにはできなかった。窓に近寄る。小柄で弱々しい姿、肉体の貧弱さは党の制服である青いオーバーオールでかえって強調されている。髪は薄い金色で、顔は生まれつき血色がよく、粗悪なせっけんや切れ味の悪いカミソリと、終わったばかりの冬の寒さのために肌は荒れている。

外を見ると、閉じた窓越しでも世界は寒そうだった。眼下の通りでは、小さな風の渦がほこりや紙の切れ端をくるくると舞い上げ、日が照って空は濃い青だというのに、すべては色彩がなかった。ただそこらじゅうにべたべた貼られたポスターだけが例外だった。黒い口ひげ顔は、街角に面したあらゆる位置から見下ろしていた。真向かいの建物の正面にも貼られている。「ビッグ・ブラザーは見ている」と標語が書かれ、黒い目がウィンストンの目を深く見抜いている。通りの高さに貼られた別のポスターは隅が破け、風の中で気ぜわしくはためいて、それがたった一語「イングソック」を隠したり見せたりしている。はるか彼方ではヘリコプターが屋根の間を降下し、一瞬デンキクラゲのように漂ったかと思うと、曲線の軌跡を描いて飛び去っていった。警察のパトロールが人々の窓をのぞき込んでいるのだ。でもパトロールはどうでもよかった。重要なのは思考警察だけだった。

ウィンストンの背後では、テレスクリーンからの声が相変わらず鋳鉄や第九次三カ年計画の前倒し達成についてしゃべりまくっていた。テレスクリーンは受信と同時に送信を行う。ウィンストンのたてる音はすべて、小さなささやき声以上なら補足される。さらに金属板の視界にいる限り、音が聞かれるだけでなく姿も見られる。もちろん、いつの時点でも自分が見られているかどうかは知りようがなかった。思考警察がある個人の回路にどのくらいの頻度で、どういう規則でプラグを差し込むのかは憶測するしかなかった。全員を常時見張っていることだって考えられなくはない。だがいずれにしても、思考警察は好きなときにこちらの回路に接続できるのだった。自分のたてるすべての音が聞かれ、暗闇の中でない限りすべての動きが検分されているという想定のもとに生きるしかなかった——そして実際にそう生きるのだった、というのもその習慣はもはや本能の一部となったからだ。

ウィンストンはテレスクリーンに背を向けたままだった。そのほうが安全だからだ。とはいえ、背中も口ほどにものを言うことがあるのは、ウィンストンもよく知っていた。勤め先の真理省は一キロ先にあり、陰気な風景の上に巨大な白い姿でそびえている。これがロンドンなのだ、とウィンストンはばくぜんとした嫌悪とともに考えた。それが首都となるエアストリップ・ワンは、オセアニアの最も人口の多い地方でもある。ロンドンが昔からこんな様子だったか、子供時代の記憶をしぼりだそうとしてみた。前からこんな、腐りかけた19世紀の家屋の眺めだったろうか、そしてその壁面が材木でつかい棒を張られ、窓は段ボールで継ぎがあてられ、屋根は波打ちトタンの継ぎ、そして荒れ果てた庭の塀があちこちに垂れ下がっていただろうか？　そして爆撃跡にはしっくい粉が宙に舞い、ヤナギランが瓦礫の上に生い茂っていただろうか。そして爆撃がもっと大きな穴を開けたところには、ニワトリ小屋じみた貧相な木造家屋が群生していただろうか？　だが無駄だった、思い出せなかった。子供時代については一連の明るく照らされたタブロー画が思い出せるだけで、それも背景はまったくなく、ほとんど細部は思い出せない。

真理省——ニュースピーク\*1ではシショウ——は視界の中の他のどんな建物とも驚くほどちがっていた。ギラつく白いコンクリートの巨大なピラミッド構造であり、次々にテラスが後退する形で空中三百メートルにまでそびえている。ウィンストンの立ち位置からだと、その白い壁面に優美な文字できざまれている、党の三つのスローガンがかろうじて読み取れた：

戦争は平和  
自由は隷属  
無知は力

真理省の地上部分には三千室あると言われており、地下にはそれに対応した分岐構造があるはずだった。ロンドン中の他の部分には、似たような外見と大きさの建物があと三つだけあった。それらは完全に周囲の建物を威圧しきっていて、このヴィクトリーマンションの屋上からだとその四つを同時に見ることができた。それは政府機構すべてを分割している四つの省の建物だった。真理省、これはニュース、娯楽、教育、芸術を担当する。平和省は戦争を担当している。愛情省は法と秩序を維持した。そして豊富省は経済関連を担当していた。これらをニュースピークで言うと、シショウ、ヘイショウ、アイショウ、ホ

\*1ニュースピークはオセアニアの公式言語である。その構造と語源については補遺を参照。



ウショウだ。

本当におっかないのは愛情省だった。窓は一切ない。ウィンストンは愛情省に入ったことがないどころか、半径五百メートル以内に近づいたこともなかった。公用以外では絶対に中に入れない建物で、その場合でも鉄条網のからんだ柵や鉄のドアや隠れた機関銃の銃座の迷路を通過しなくてはならなかった。その外壁に向かう通りですら、ジョイント式棍棒で武装した黒い制服姿のゴリラ顔の警備員だらけだった。

ウィンストンはいきなり振り向いた。顔は、テレスクリーンに面するとき望ましいとされる、静かな楽観の表情に設定しておいた。部屋を横切って小さな台所に入る。こんな時間に退省したことで、食堂での昼食を逃してしまい、そして台所には明日の朝食用に残しておくべき黒パンのかたまり以外には食べ物が無いのも知っていた。柵から透明な液体のボトルを取った。無地の白いラベルに「勝利ジン」と書かれている。中国の米の酒めいた、胸の悪くなる油っぽいにおいを放っている。ウィンストンはほとんどティーカップ一杯分それを注ぐと、ショックに備えて心の準備を整えて、葉のように一気に飲み干した。

一瞬で顔が紅潮し、目からは水気がほとぼした。ブツは硫酸まがいで、さらにそれを飲み干すのは後頭部をゴムの棍棒でぶん殴られたような感じをもたらした。でも次の瞬間、腹の中の炎上はおさまって、世界はもっと楽しげに見えてきた。「勝利タバコ」と書かれたくしゃくしゃの箱からタバコを取り出して、注意散漫なままそれを縦に持つと、タバコが床に落ちてしまった。次の一本ではもっとうまくいった。居間に戻ると、テレスクリーンの左に置かれた小さなテーブルにすわった。テーブルの引き出しからはペン立てとインキ、そして分厚い四つ折り版の白紙の本を取り出した。背は赤くて、表紙は大理石模様だ。

どういうわけか、居間のテレスクリーンは変わった位置にあった。通常なら部屋の奥の壁に取り付けられて部屋全体を見渡せるようになっているのに、ここでは窓の向かいの長い壁に取り付けられていた。その片側には浅いアルコーブがあって、いまウィンストンがすわっているのもそこだ。たぶんこのアパートが建てられたときには、本棚を作る場所だったのだろう。アルコーブにすわってずっと奥に身を寄せると、テレスクリーンの視界から逃れることができた。もちろん音は聞かれるが、いまの位置にいる限り、見られることはない。これからやろうとしていることを思いつかせたのは、一部にはこの部屋の変った形なのだった。

でも、いま引き出しから取り出した本もまたそれをうながしたのだった。それは異様に美しい本だった。なめらかでクリーム入りの紙は、少し古びて黄ばんでいたが、過去少なくとも四〇年間は作られていないような紙だった。でも、その本は四〇年よりずっと古いことが推測できた。街のスラムじみた一角（どの一角だったかはいまや思い出せなかった）にあった、薄汚い小さなジャンク屋のウィンドウに転がっていて、すぐさまそれを所有したいという圧倒的な欲望にとらわれてしまったのだった。党员たちは通常の店に入っただけとはいけなかった（「自由市場での取引」と言われていた）、この規則はあまり厳守されていなかった。靴のひもやカミソリなど、それ以外の方法では手に入らないものがいろいろあったからだ。通りを急いできよきよと見渡すと、店にすべりこんで本を二ドル五〇で買った。その時点では、何か特に用途があってほしかったわけではなかった。後ろめたい思いでそれをブリーフケースに入れて持ち帰った。なにも書かれていなくても、それは危険な所有物だった。

これからやろうとしていたのは、日記を始めることだ。これは違法ではなかった（違法

なことなどなかった。というのも法律がもうなかったからだ)が、もし見つければ、罰として死刑になるか、二十五年の強制労働キャンプに送られるのはほぼ確実だった。ウィンストンはペン先を軸につけると、なめて油気を取った。ペンは古めかしい道具であり、もはや署名にすらほとんど使われず、ウィンストンがそれをこっそりとかなり苦勞して入手したのは、この美しいクリーム色の紙がインク鉛筆で殴り書かれるよりも、本物のペン先で書かれるべきものだという気がしたからというだけのこと。実は、手書きにはあまり慣れていなかった。短いメモを除けば、話筆ですべて口述するのが通例だったからだが、これはもちろん目下の目的のためには不可能だった。ペンをインキにつけて、一瞬ためらった。下腹部に震えが走る。紙にしるしをつけるのは、決定的な行動となる。小さいへたくそな字で、かれはこう書いた：

1984年4月4日

そして身を引いた。まったくの心細さにとらわれてしまったのだ。そもそも、いまが本当に1984年だということさえ、まるで確実にはわかっていなかったのだ。たぶんそのくらの年代のはずだ。自分が三十九歳なのはかなり自信があったし、自分が一九四四年か一九四五年に生まれたと思っていたからだ。でも最近では、一年か二年の範囲内ではどんな日も特定できないのだった。

急に思いついた疑問として、自分はいったい誰のためにこの日記を書いているのだろうか？ 未来のために、未だ生まれぬ者たちのために。心はしばらく、ページ上のあやしげな日付のまわりをさまよひ、それからニュースピーク用語「二重思考」<sup>ダブルシンク</sup>にどしんとぶちあたった。初めて、自分のやったことがどれほどのものが腑に落ちた。未来とどうやって対話できるというのか。それは本質的に不可能なことだ。未来は現在と同じかちがうかで、同じなら自分の書くことに耳を貸したりはしないだろうし、もしちがってれば、自分の窮地などは無意味になる。

しばらくかれは、呆けたように紙を見つめたまますわっていた。テレスクリーンは勇ましい軍楽に変わっていた。自分自身を表現する力を失ったというだけでなく、自分のもと何をおもうとしていたのかも忘れたというのは不思議なことだった。過去何週間も、この瞬間のために準備を整えてきたし、勇氣以外の何かが必要になるとは思いもしなかった。実際に書くのは簡単だろうと思っていた。文字通り何年にもわたり、頭の中を駆けめぐり続けていた止まらない落ち着かない独白を、紙に写せばいいだけのことだ。でもこの瞬間、その独白すら干上がってしまった。さらに静脈瘤の潰瘍が我慢できないほどかゆくなった。絶対にかいたりしないようにはしていた。かけば必ず炎症を起こすからだ。カチカチと秒が過ぎていく。目にはいるのは、目の前のページの白さと、足首の上の皮膚のかゆみ、けたたましく鳴り響く音楽、そしてジーンが引き起こした軽い酔いだけ。

突然、パニックにとらわれたように書き出したが、自分が何を書いているのか半分くらいしか認識していない状態だった。小さいが子供じみた手書き文字はページを上下に波打ち、最初は大文字をすつとばし、さらには読点すらなくなっていった。

1984年4月4日。昨夜は映画へ。全部戦争映画。すごくよかったのが難民だらけの船が地中海のどこかで爆撃されてるやつ。でかい巨大なでぶ男が泳いで逃げようとしているのをヘリコプターが追いかけるショットで観客は大受け、最初はイルカみたいに水の中をよたよた泳いでたのが、次にヘリコプターの銃の照準ごしに

なって、それから穴だらけになってまわりの生みがピンク色になって穴から水が入った見たいにいきなり沈んで、観客は沈んだときに大笑いして叫び、それから子供でいっぱい救命ボートの上空にヘリコプターが滞空してるのが見えて、触先では中年女がユダヤ女だったかもしれないけど身を起こしてすわって腕には三歳くらいの男の子と抱いて、男の子は怖がって泣き叫び女の胸の間に頭を隠してまるで女にそのまま穴をほってもぐろうとしているかのようで女はその子に腕をまわしてなぐさめながらも自分だって恐怖で真っ青で、ずっと子供をできるだけかばって腕が銃弾を防げるとでも思っているみたいで、そこでヘリコプターがそいつらに二〇キロ爆弾をくらわしてすごいせん光でボートはマッチ棒くらいこなごなになって、子供の腕がぐんぐんと空にとばされるすばらしいショットがあつて鼻面にカメラをつけたヘリコプターが後を追ったようで党のシートからは大喝采だったがプロレ席の女がいきなりなんくせつけはじめてこんな子供たちの前で見せんなんてよくねえの子どもたちの前ってなダメだのとわめきだしたんだけど警察がきて外に追い出してあの女には何もおきなかったらうなプロレの言うことなんてだれもきにしなまったくプロレらしいものいいあのれんちゅうときたらけっして――

ウィンストンは書くのをやめたが、それは一部はこむらがえりが起きたせいだった。なぜ自分がこんなクズの羅列を吐きだしたのかはわからなかった。でも不思議なことに、これを書いているうちにまったくちがう記憶が心のなかではっきりしてきたので、ほとんどそれを書き留めているような気になったことだった。今日帰宅して日記をはじめようといきなり決心したのも、このもう一つのできごとのせいだったということに思い当たった。

それはその朝に省で起きたことだった。こんなあいまいなことが起きたと言えるのであればの話だが。

ほぼ 1100 時で、ウィンストンの働く記録部では作業仕切りの中から椅子を引っ張り出して、通路の真ん中の大きなテレ画面の向かいに集合し、二分間憎悪の準備をしているところだった。ウィンストンはちょうど中央の列にすわろうとしていたが、そのときこれまで見覚えはあっても口をきいたことはなかった人物二人が、不意に部屋に入ってきた。一人は廊下でよくすれちがう女だ、名前は知らなかったが、創作部で働いているのは知っていた。おそらく――ときどき油だらけの手をしてスパナを持っていたから――小説執筆装置のどれかで機械関係の仕事をしているのだろう。くっきりした印象の女で、二十七歳くらい、濃い黒髪をしていてそばかす顔、すばやく活発な動きをしている。青年反セックス同盟の紋章である細い深紅の腰帯をオーバーオールウェストに何度か巻いて、そのきつさはヒップの形のよさがちょうど出るくらいとなっていた。ウィンストンは一目見て彼女が嫌いになった。理由はわかっていた。彼女が漂わせているホッケー場や水風呂やコミュニティハイキングや全般におきれいさ加減の雰囲気のためだ。女はほとんどみんな嫌いだったし、若くてきれいな女は特に嫌いだった。党の最も頑迷な支持者、スローガンの鵜呑み屋、非正統行動の素人スパイや嗅ぎ出し屋を勤めるのはいつだって女、特に若い女だった。でもこの女は他のみんなよりもっと危険だという印象を与えた。一度、廊下ですれちがったときに、彼女は脇目でちらりとこちらを見たが、それはかれを突き刺すようで、一瞬真っ黒な恐怖でいっぱいになってしまったほどだ。彼女が思考警察の手先かもしれないとさえ思ったこともあった。確かにそれはきわめてあり得ないことだった。でも、彼女が近くにいるときには、敵意と恐怖が混ざり合ったような、奇妙な居心地の悪さを感じ

じ続けていたのだった。

もう一人はオブライエンという名前の男で、党中枢の一員で、きわめて重要かつ上層の地位にあるために、ウィンストンはそれがどんなものか漠然としか理解していなかった。党中枢の一員の黒いオーバーオールが近づいてくるのを見て、椅子のまわりの人々は一瞬だまりこんだ。オブライエンは大柄でがっしりした男で、首は太く、顔は荒々しくユーモラスで険しかった。立派な外見とは裏腹に、その振る舞いにはちょっとした魅力があった。鼻のメガネをずらすという小技が、不思議なくらい警戒をとく——いわく言い難いかたちで、不思議に洗練されているのだ。それは、未だにこういう発想をする人がいるなら、十八世紀の貴族が嗅ぎタバコの箱を差し出す様子を思わせるものと言えるかもしれない。ウィンストンはほぼ十二年にわたり、オブライエンを十二回くらい見たのだろうか。深く惹かれていたが、それは単にオブライエンの都会的な身のこなしとボクサー的な体つきとのコントラストに魅了されたからというだけではない。それよりずっと大きいのは、オブライエンの政治的な正当性が完全ではないという秘密の信念——いや信念ですらなく、ただの希望——のためだった。オブライエンの顔の何かが、どうしてもなくそれを示唆していた。そして一方で、かれの顔に書かれているのは非正統性ですらなく、単なる知性なのかもしれない。でもいずれにしても、オブライエンは何とかテレスクリーンを出し抜いて二人きりになれば、話ができそうな相手に見えたのだった。ウィンストンはこの憶測を確認しようという努力は一切したことがなかった。いや、それをする方法がなかったのだ。この瞬間、オブライエンは腕時計を見て、ほとんど 1100 時なのを見ると、二分間憎悪が終わるまで記録部にいようと明らかに決めたようだ。ウィンストンと同じ列の、数個離れた椅子にすわった。二人の間には、ウィンストンのとなりの区画で働く小柄で砂色の髪をした女がすわった。黒髪の女はすぐ後ろにすわっている。

次の瞬間、部屋の奥にある大テレスクリーンから、醜悪でけずるようなきしり音が、まるでオイル無しで巨大な機会が動いているかのように飛び出してきた。人々の歯をくいしばらせて、首の後ろの毛を逆立てるような音だった。憎悪がはじまったのだ。

いつもながら、人民の敵エマニュエル・ゴールドスタインの顔が画面に映し出された。観客のあちこちからシッシッとヤジがきこえた。小さな砂色の髪の子は、恐怖と嫌悪の入りまじった悲鳴をあげた。ゴールドスタインは、裏切り者の反動主義者で、かつてはるか昔に（どのくらい昔かは、だれもまともに覚えてはいなかった）党の主要人物の一人でほとんどビッグ・ブラザー自身と肩を並べるくらいだったのに、反革命活動に手を染めて、死刑を宣告されたが、謎の脱出をとげて姿を消したのだった。二分間憎悪の番組は毎日ちがったが、ゴールドスタインが主要登場人物でないものは一つもなかった。ゴールドスタインは第一の裏切り者であり、党の純粋性を最もはやく汚した人物だった。それ以降の党に対する犯罪、すべての裏切り、妨害行為、邪説、逸脱行為はまっすぐゴールドスタインの教えから生じたものだった。どこかしらでかれはまだ生きており、陰謀を生み出している。たぶんどこか海の向こうで、外国の出資者に保護をされているのか、あるいは——ときに噂されるように——このオセアニア自身のどこかにある隠れ家だ。

ウィンストンは胸がしめつけられた。ゴールドスタインの顔を見るたびに、どうしても痛々しい感情が入り交じってしまう。その顔はやせたユダヤ人顔で、大量のもじゃもじゃした白髪のをさかだたせ、小さな山羊ヒゲをはやしている——賢そうな顔だが、なぜか本質的に嫌悪をもよおさせ、メガネが端にのっかっている長細い鼻には年寄りじみたまぬけさがあった。ヒツジの顔に似ていて、声もヒツジめいたところがあった。ゴールドスタイン

ンはいつもながら党の政策に対して悪意に満ちた攻撃を加えているところだった——あまりに大げさな攻撃なので、子供でも見抜けるほどのものだが、でも多少はもってもらいなので、自分ほど冷静でない他の連中ならこれを真に受けるのではないかという警戒感で胸がいっぱいになる。かれはビッグ・ブラザーを罵倒し、党の独裁を糾弾し、ユーラシアとの即時平和締結を要求し、言論の自由や報道の自由、集会の自由、思想の自由を支持し、革命は裏切られたとヒステリックに叫んでいた——そしてこのすべては、党の弁舌家たちの一般的なスタイルをある意味でパロディ仕立てにした、早口で長い単語を多用する演説形式で行われており、ニュースピーク用語さえ使われていた。それもどんな黨員だろうと現実生活では普通使わないと思われるほど大量に使っていたのだ。そしてその間ずっと、ゴールドスタインのまことしやかなご託が隠蔽しようとしている現実を疑う者がないように、テレスクリーン上のゴールドスタインの頭の後ろには、無数のユーラシア軍の行列が行進していた——何列も何列も、無表情なアジア敵顔立ちのがっしりした男たちが次々に、画面に浮かび上がっては消え、まったく同じような別の者にとってかわられる。兵たちの軍靴による鈍いリズムカルな足音が、ゴールドスタインのメエメエとした声の背景になっていた。

憎悪が三十秒も続かないうちに、部屋の半数の人々からは抑えようのない激怒の叫びが起こっていた。スクリーン上の自足しきったヒツジのような顔と、その背後のユーラシア軍のおそるべき勢力は、あまりに耐え難かった。それに、ゴールドスタインの姿やかれについての考えだけでも、自動的に恐怖と怒りを引き起こす。ゴールドスタインは、ユーラシアやイースタシアにもまして一貫した憎悪の対象となっていた。これらの二国であれば、片方と戦争状態のときにはもう片方とは平和を保っているのがふつうだったからだ。でも奇妙なことに、ゴールドスタインはだれからも憎まれ、軽蔑されているのに、そして毎日、それも日に何千回も、演台やテレスクリーン、新聞、本でかれの理論は反駁され、たたきつぶされ、バカにされ、惨めなゴミクズとして万人の目にさらされているのに——これだけのことがあるにもかかわらず、その影響力は決して弱まらないようだった。いつもかれに誘惑されるのを待っている新しいまぬけがいる。毎日のように、かれの命令で活動しているスパイや妨害工作員が思考警察に暴かれていた。かれは広大な陰のような軍隊、国家を転覆させることだけに専念する陰謀家たちの地下ネットワークの司令官なのだ。その名も友愛といわれていた。またささやかれる話としては、ゴールドスタインが書いた、あらゆる邪説を集めた恐るべき本があって、それがあちこちで密かに流通しているのだとか。題名のない本だった。人々は、それに万が一言及することがあっても、単に「あの本」と呼んでいた。でもそういう話は漠然とした噂でしか伝わってこなかった。友愛もあの本も、口にのぼらせずにすませられるなら、通常の黨員はだれでも口にしないようにしていた。

二分目に入ると憎悪は狂乱状態に高まった。人々は席でびよんびよん飛びはね、スクリーンからくるメエメエとした気の狂いそうな声をかき消そうと思いつき絶叫していた。砂色の髪をした女は明るいピンク色になって、口は陸に上がった魚のようにばくばくしている。オブライエンの重たい顔ですら紅潮していた。椅子にまっすぐすわり、強そうな胸は襲い来る波に立ち向かっているかのように、ふくれては震えていた。ウィンストンのすぐ後ろの黒髪女は「ブタ！　ブタ！　ブタ！」と叫びだして、いきなり重たいニュースピーク辞書を手にすると、スクリーンに投げつけた。それはゴールドスタインの鼻に当たってはねかえった。声は止めようもなく続いていた。一瞬頭がはつきりすると、ウィン

ストーンは自分自身もほかのみんなといっしょに怒鳴り、椅子の横木を激しくかかとでくたしてはいるのに気がついた。二分間憎悪のひどいところは、参加が義務づけられているということではなく、つい参加せずにはいられなくなってしまうということだった。ものの三十秒で、どんな気取りも必ずまるで不要になる。恐怖と復讐心の醜悪なエクスタシー、殺意、拷問欲、大ハンマーで顔をたたきつぶしたい欲望が、集団の人々すべての間を電流のように走り抜けるようで、それが人を己自身の意志にすらそむかせて、顔をゆがめた叫ぶキチガイにしてしまう。それでありながら、そこで感じられる怒りは抽象的で方向性のない感情であり、溶接トーチの炎のように、ある対象から別の対象へと切り替えられる。だからある瞬間にはウinstonの憎悪はまったくゴールドスタインに向かわず、正反対のビッグ・ブラザーと党と思考警察に向いていた。そしてそうした瞬間には、かれの心はスクリーンに映りバカにされている孤独な異端者、ウソまみれの世界における、たった一人の真実と正気の守護者のほうに向かうのだった。でもその次の瞬間には、まわりの人々と一つになって、ゴールドスタインについて言われていることはすべて本当に思える。そういう瞬間には、ビッグ・ブラザーに対する密かな嫌悪は崇拜にかわり、ビッグブラザーは無敵の恐れをしらぬ守護者としてそびえあがるようで、それがアジアの群衆や、孤立や無力さやその存在自体をめぐる疑念にもかかわらず、なにやら悪意ある詐術師として声の力だけで文明の構造を破壊できるゴールドスタインに対して岩のように立ちはだかる。

ときには、自分の憎悪を自発的にこちらやあちらの対象へと切り替えることさえできた。いきなり、悪夢の途中で頭を枕からもぎはなすときおような荒々しい努力によって、ウinstonは自分の憎悪をスクリーンの顔から背後の黒髪女に転移させるのに成功した。鮮明で美しい幻覚が頭の中を走る。ゴム警棒で殴り殺してやる。はだかにして杭にしばりつけて、聖セバスチアンのように無数の矢を打ち込んでやる。陵辱して絶頂の瞬間にのどをかき切ってやる。それ以上に、前よりよかったのは、自分がなぜ彼女を憎んでいるのかに気がついたことだった。嫌いなのは、彼女が若くてきれいでセックス拒否だったからだ。彼女とベッドにいきたいのに決してそれはかなわない。なぜならその甘いしなやかな腰は、こちらに腕をまわしてくれと頼んでいるようでありながら、そこにあるのは唯一、あの不愉快な深紅の帯、貞操の強烈なシンボルだけなのだ。

憎悪はクライマックスを迎えた。ゴールドスタインの声は本物のヒツジの鳴き声となり、その顔も一瞬だけ本当にヒツジになった。それからヒツジの顔がとけてユーラシア兵の姿となり、前進しつつあるようで巨大でおそろしげで、サブマシンガンをとどろかせ、スクリーンから飛びだしてくるように見えたので、最前列の何人かは椅子の中で本当に身をすくめていた。でもその瞬間、みんながほっとして深い溜息をついたのは、その敵意に満ちた姿がとけて、ビッグブラザーの顔になったからだ。黒髪、黒い口ひげ、力に満ちて謎めいた平穏さを見せ、あまりに大きすぎてほとんどスクリーンいっぱいになっている。だれもビッグブラザーが何を言っているのか聞いていなかった。単に勇気づけの数語、先頭のとどろきの中で発せられ、個別に意味はないが、単にそれが言われたというだけで落ち着きを取り戻させてくれるようなことばだ。そしてビッグブラザーの顔はまたとけ去り、かわりに党の三つのスローガンが、太字で

戦争は平和

自由は隷属

無知は力

だがビッグブラザーの顔はスクリーン上に何秒か残っているかのようで、まるでそれがみんなの目玉に与えたインパクトは、すぐに消え去るには鮮明すぎたともいうようだった。小さな砂色の髪のはなは、前の椅子の背にしがみついた。「我が救世主よ！」とおぼしき震えるようなつぶやきとともに、彼女はスクリーンのほうに腕をのばした。それから顔を手にうずめた。お祈りを唱えているのは明らかだ。

この瞬間、そこにいる集団の全員が、深くゆっくりしたリズムカルな「B-B!……B-B!……B-B!」という詠唱を始めた——何度も何度も、非常にゆっくり、最初のBと二番目のBの間に長い間をおいて——思いつぶやくような音だが、なぜか不思議と野蛮で、その背後にははだしの足踏みやトムトムの鼓動が聞こえるような感じがする。それをおそらくは三十秒ほども続けただろう。それは圧倒的な感情の瞬間にしばしば聞かれる繰り返しだった。部分的には、ビッグブラザーの叡智と威厳に対する賛歌のようなものだが、それ以上に自己催眠行動であり、リズムカルな騒音で意識を意図的におぼれさせようとするものだ。ウィンストンは内蔵が冷え込むように感じた。二分間憎悪ではどうしても全般的な興奮状態は共有してしまうが、この人間以下の「B-B!……B-B!」の詠唱にはいつも恐怖でいっぱいさせられる。もちろん、ほかのみんなにあわせて詠唱はした。他にどうしようもなかった。感情を解体し、表情をコントロールし、他のみんなにあわせるのは、本能的な反応だった。でも、目にあらわれた表情が、ひょっとしてそのコントロールを裏切ったかもしれない期間がものの数秒ほどあった。そしてまさにその瞬間に、その重大なことが起きたのだ——もし本当にそれが起きたのだとすればの話だが。

一瞬、かれはオブライエンの視線をとらえた。オブライエンは立ち上がっていた。メガネをはずしており、あの特有の仕草でそれを鼻ののせなおすところだった。でも二人の目がほんの一瞬だけ出会い、そしてそれが起こっている間、ウィンストンにはオブライエンも自分と同じことを考えているとわかった——そう、確信できた！ まちがいないメッセージがかわされた。二人の心が開いてお互いの思考が目を通じて流れ込んでいるようだった。オブライエンはこう言っているようだった：「わたしは君の味方だ。君がずばり何を感じているか知っている。その軽蔑、その憎悪、その嫌悪もすべてわかる。でも心配するな。わたしは君の味方だ！」そこで情報の一閃は消え、オブライエンの顔は他のみんなと同じくとらえどころがなくなった。

それだけのことであり、実際に起こったのかもはや確信がなくなっていた。こうした出来事には決して続編がない。それは単に、自分以外にもだれかは党の敵なのだという信念、または希望を維持し続けるだけのものだった。莫大な地下の陰謀の噂は実は本当なのかもしれない——友愛は実在するのかもしれない！ 果てしない逮捕や告白や処刑にもかかわらず、友愛が単なる神話ではないと断言するのは不可能だった。それを信じる日もあれば信じられない日もあった。証拠はなく、どうとでも解釈できる、あるいは何の意味も持たないような、かすかなほのめかしがあるだけだ。ちょっと耳に入った会話の断片、便所の壁のかすかな落書き——あるときは、見知らぬ人物二人が出会ったときに、ちょっとした手の動きがまるでお互いを認め合ったかのような印に思えたこともあった。どれも憶測でしかない。すべて自分の妄想だという公算も強い。二度とオブライエンのほうを見ないままウィンストンは自分の区画に戻った。その一瞬の接触をさらに進めようという発想はほとんど思いもよらなかった。どう進めればいいのか知っていたとしても、考えられないほど危険な行為だ。一秒、二秒ほど、二人はあいまいな視線をかわし、それっきりだ。でもそれだけでも、ここで強いられた閉塞した孤独の中では特筆すべきできごとなの

だった。

ウィンストンは気を取り直すと身を起こしてすわりなおした。そしてゲップをした。ジンが腹からのぼってきている。

ページに視線の焦点をあわせた。よるべなく回想するうちに、自動書記のように筆記もしていたのがわかった。そしてそれは、前のようなぐしゃぐしゃのへたくそな手書きではなかった。ペンは自在になめらかな紙の上をすべり、大きくきれいな大文字でこう書いていた。

打倒ビッグブラザー

打倒ビッグブラザー

打倒ビッグブラザー

これが何度も何度も繰り返され、ページ半分を埋め尽くしていた。

軽いパニックを抑えられなかった。バカげた話だ。こんなことばを書いたからといって、そもそもこの日記帳を開いたという最初の行動より危険というわけではなかったのだから。でも一瞬、この汚れたページを破り捨てて日記自体をやめてしまおうという誘惑にかられた。

でもそうはしなかった。無駄だということを知っていたからだ。打倒ビッグブラザーと書こうと書くのをやめようと、何のちがいもない。日記を続けようと続けまいと何のちがいもない。どのみち思考警察につかまる。かれはほかのすべての犯罪を包含する、基本的な犯罪を犯した——そして紙にペンを走らせずとも、やはり犯していただろう。それは思考犯罪と呼ばれる。思考犯罪は永遠に隠しおおせられるものではない。しばらくはうまくかわせるだろうし、それを何年も続けることだってできるが、いずれは連中につかまる。

それはいつも夜のことであった——逮捕は必ず夜に起こる。いきなり眠りから引きずりだされ、荒っぽい手が肩をつかんで揺すり、電灯が目に照らされ、怖い顔がベッドを取り巻いている。大半の場合、裁判もなければ逮捕の報道もない。人々は夜のうちに、あっさり消える。名前は住民登録から消され、これまで行ったことのあらゆる記録も消され、その人の一回限りの存在が否定されて、そしてわすれられる。破壊され、消し去られる。蒸発、というのが通常の表現だ。

一瞬、かれはヒステリーのようなものに捕らわれた。慌てた乱雑な殴り書きを始めた。

射殺されるかまわない首の後ろを撃たれるかまわない打倒ビッグブラザーいつも  
の後ろを撃つかまわない打倒ビッグブラザー——

椅子の背にからだを預けて、ちょっと自分を恥ずかしく思い、ペンを置いた。次の瞬間、かれは飛び上がった。ドアにノックがしたのだ。

もう来たのか！　かれはネズミのようにじっとして、ノックの主がだれであれ、一回であきらめて帰ってくれないかという無駄な希望を抱いていた。だがそうはいかない。ノックは繰り返された。これ以上グズグズするのは最悪だ。心臓は太鼓のように高鳴っていたが、顔は、長い習慣のために、たぶん無表情だっただろう。立ち上がると、足取り重くドアに向かった。



## 第2章

ドアノブに手をかけたとき、日記をテーブルで開いたままにしてあるのが目に入った。一面に「打倒ビッグブラザー」と書かれており、その時はほとんど部屋の向こうから読めそうなくらい大きい。考えられないくらいバカな行為だった。でも、これほどのパニックの中でも、インクが乾かないうちに本を閉じてクリーム状の紙にしみを作りたくなかったのだ、とウィンストンは悟った。

息を吸い込むとドアを開けた。すぐに全身を暖かい安堵の波が走り抜ける。外に立っているのは生氣のない、粉碎されたような様子で、髪はまばら、顔はしわだらけだった。

「ああ同志」と彼女は陰気で泣き言めいた声で口を開いた。「帰ってらしたのが聞こえたと思ったもので。ちょっときて、うちの台所の流しを見て頂けませんか。詰まっています——」

同じ階のご近所の奥さん、パーソンズ夫人だった（「夫人」は党があまりいい顔をしない用語だった——だれでも「同志」と呼ぶことになっていた——が、一部の女性に対しては本能的にこの用語が使われてしまうのだった）。三〇歳くらいだが、ずっと歳を取って見えた。顔のしわにほこりが詰まって異様な印象を受ける。ウィンストンは彼女について廊下を下った。こうした素人修理作業はほとんど毎日のように起こる悩みの種だった。勝利マンションは古いアパートで、竣工は一九三〇年かそこらだから崩壊寸前だった。壁や天井のしっくいはずれがれ落ち、配管は霜が厚くなればすぐに破裂し、雪がふれば雨漏りし、暖房も経済性のために完全に止められていなくても、スチーム半量でしか動かない。自分ではできない修理はどこか遠くの委員会に委ねられており、かれらは窓ガラスの修理ですら二年も待たせるのだった。

「もちろんトムが家にいればこんなお願いはしないんですけど」とパーソンズ夫人は上の空で言った。

パーソンズ一家のアパートはウィンストンのものより大きかったが、ちがった形でみすばらしかった。すべてがいためつけられたような、踏みつけられたような、まるで何か凶暴な巨獣がついさっき訪れたかのような様子をしていて。邪魔なスポーツ用品——ホッケースティック、ボクシングのグローブ、破れたサッカーボール、裏返しの汗だらけのトランク——が床中に散らばり、テーブルの上には汚れた皿とページの端を折った練習問題帳が散在していた。壁には若人連盟とスパイ団の赤い旗と、ビッグブラザーの大型ポスターがあった。このビル全体でどこでもありがちな茹でキャベツのにおいがしたが、その間からもっと鋭い汗の悪臭がして、それは——嗅ぎでわかるのだが、なぜわかるかはわからない——いまここにいない人物の汗なのだった。別の部屋では、くしとトイレトペーパー製の即席楽器を持っただれかが、テレスクリーンからまだ流れ続ける軍楽にあわせて演奏しようとしていた。

「子どもたちですよ」とパーソンズ夫人はドアに向かって半分上の空の視線を投げた。「今日はずっと家におりましてね。だからもちろん——」

彼女はいつもこのように文を途中で止めてしまうのだった。

流しはほとんどふちいっぱいまで、汚らしい緑がかった水がたまっていて、それがすすまじいキャベツ臭を放っている。ウィンストンはひざをついて、配管の曲げ部分を調べた。手を使うのは大嫌いだったし、身をかがめるのもいやだった。かがむといつも咳がはじまってしまうのだ。パーソンズ夫人はなすすべもなく見守っていた。

「もちろんトムが家にいたら、すぐに直してくれるんですが。あの人、その手のことは大好きですから。手作業は本当に上手でしてね、トムは」

パーソンズは真理省でのウィンストンの同僚だった。小太りで、活発だがあぜんとするほどバカで、まぬけな熱意でいっぱい——何一つまったく疑問に思わない、献身的なドタ作業要員で、党の安定は思考警察よりもずっとこうした人々のおかげなのだ。三十五歳でちょうどいやいやながら青年連盟から追い出されたところで、そして青年連盟へと卒業する以前は、スパイ団に規定年齢を一年超えて在籍し続けていた。省では、知性を必要としない下働き職に雇われていたが、スポーツ委員会やその他コミュニティ旅行や自発でも、節約キャンペーンやボランティア活動全般では大活躍だった。パイプを吹かすあいまに、静かな誇りをもって、自分が過去四年にわたり毎晩コミュニティセンターに顔を出したのだと話してくれたものだ。どこへ行くにも、圧倒的な汗臭さ——それはかれの人生の奮闘ぶりを無意識に証言しているともいえる——がついてまわり、立ち去ったあともそれがしばらく残っているような人物だった。

「スパナはありますか」とウィンストンは、曲げ配管のねじと格闘しながら言った。

「スパナですか」とパーソンズ夫人はすぐさまうろたえはじめた。「いや、ちょっとわかりかねます。子どもたちなら——」

ブーツの足音とくし笛の一吹きとともに、子どもたちが居間に突進してきた。パーソンズ夫人はスパナを持ってきた。ウィンストンは水を抜いて、パイプをつまらせていた髪のかたまりを嫌悪と共に取り除いた。蛇口からの冷水でできる限り指をきれいにすると、部屋を移った。

「手を挙げろ！」と粗野な声が叫んだ。

見栄えのいい、頑丈そうな九歳の少年がテーブルの向こうから顔を出し、おもちゃの自動拳銃でこちらを脅かしている。その妹は二歳ほど年下だが、木のかけらで同じ動作をしている。どちらも青のショーツ灰色のシャツと赤いネッカチーフをしている。スパイ団の制服だ。ウィンストンは両手を頭上にあげたが、穏やかならぬ気分がした。少年の態度があまりに凶悪で、それがただのお遊びには思えなかったからだ。

少年は叫んだ。「この裏切り者め！ 思考犯罪者め！ ユーラシアのスパイめ！ 撃ち殺してやる！ 蒸発させてやる！ 塩鉱山送りにしてやる！」

いきなり二人はウィンストンのまわりを飛びはね、「裏切り者！」「思考犯罪者！」と叫び、少女は兄のあらゆる動きを真似していた。なぜかちょっとこわい感じがした。いずれは人食いトラになるはずの子供のトラがじゃれているのを見るような思いだった。少年の目には計算高いどう猛さがあって、明らかにウィンストンを殴るか蹴るかしたいと思っており、そしてあと少し大きくなればそれができることを認識しているのうかがえた。こいつの手にしているのが本物の拳銃でなくてよかった、とウィンストンは思った。

パーソンズ夫人の目は不安そうにウィンストンから子供たちへと移り、そしてウィンス

トンへと戻った。居間のもっと明るい照明の下で見ると、夫人の顔のしわには本当にほこりが詰まっているのが見えて、ウィンストンはおもしろがった。

「この子たちも騒々しくて。二人とも絞首刑を見に行けないのでおかんむりなんですよ、この様子は。わたしは忙しすぎて連れて行けませんし、トムも間に合うように仕事から帰ってこられないもので」

「なんで絞首刑を見に行けないの？」と少年はその大声で吠えた。

「絞首刑見たい！ 絞首刑見たい！」と少女は、相変わらず飛びまわりながら唱えた。

そういえば今晚、戦争犯罪で有罪になったユーラシアの囚人たちが公園で絞首刑になるのだった。これは月に一度行われ、人気の高い見せ物だった。子どもたちはいつも、連れて行けとせがみたおす。ウィンストンはパーソンズ夫人に失礼すると告げて、戸口に向かった。でも通路を六歩もいかないうちに、何かが首のうしろに当たって悶絶しそうな痛みをもたらした。灼熱した針金で突き刺されたかのようだ。振り返ると、ちょうどパーソンズ夫人が息子を戸口にひきずりこむところで、その少年はパチンコをポケットにしまっていた。

「ゴールドスタインめ！」と少年は、ドアの閉まりがけにこちらに怒鳴った。でもウィンストンがもっとも衝撃を受けたのは、夫人の灰色っぽい顔に浮かんだ、無力な恐怖の色だった。

自分の家に戻ると、ウィンストンは足早にテレスクリーンの前を通ってまたテーブルについたが、まだ首はさすり続けていた。テレスクリーンからの音楽は止まった。かわりに事務的な軍隊調の音が、ちょっと荒々しい声色で、アイスランドとフェロー諸島の間に停泊したばかりの浮体要塞の装備に関する説明を読み上げていた。

あんな子どもたちをもって、あのあわれな女性は恐怖の人生を送っているにちがいない、とウィンストンは思った。あと一年、二年もすれば、子供二人は日夜、非服従のしるしを探して母親を監視するようになる。最近の子供はほとんど例外なくひどいものだった。最悪なのは、スパイ団のような組織を通じて、子どもたちが系統的に手のつけられない小野蛮人に変えられてしまっているのに、それが党の規律に反抗しようという傾向にはまったくつながらないということだった。それどころか、子どもたちは党やそれと関係したものすべてを敬愛していた。歌や行進、旗、ハイキング、模擬小銃での訓練、スローガンの斉唱、ビッグブラザー崇拜——子どもたちにしてみれば、これはみんな輝かしいゲームでしかない。その兇暴さはすべて外に、国家の敵に、外国人、裏切り者、妨害工作員、思考犯罪者に向けられた。三十歳以上の人々は、自分の子どもたちを怖がっているのが通例だった。無理もない。「タイムズ」紙には毎週のように、盗み聞きをした子ネズミ——一般には「英雄児童」と呼ばれていた——がよからぬ発言を耳にして、思考警察に自分の両親を告発したというニュースが出ていたのだから。

パチンコ弾からの痛みはおさまった。半ばうわの空でペンを取り上げると、日記にこれ以上書くことがあるかどうかを考えた。突然、かれはまたオプライエンのことを考えはじめた。

何年も前——どのくらいになるか？ もう七年になるはずだ——真っ暗な部屋を歩いている夢を見た。そして片側にすわった人が、通りすがりにこう言ったのだ：「いつか暗闇のない場所で会おう」これはとても静かに、ほとんどさりげなく言われた——単なる発話で、命令ではなかった。ウィンストンは足を止めることもなく歩き続けた。不思議なのはそのときの夢の中では、そのことばはあまり印象に残らなかったということだ。それ

が重要に思えてきたのは、後になってのことで、それも徐々にそう思えてきたのだ。オブライエンを初めて見たのがその夢の前なのか後なのかは、もう覚えていない。その声がオブライエンのものだと見極めたのも、いつだったのか忘れた。でもいずれにしても、そう見極めたのだ。闇の中でかれに話しかけたのはオブライエンだった。

オブライエンが敵なのか味方なのか、ウィンストンはちっとも確信できなかった——今朝の目配せの後でも、相変わらず確信は不可能だった。どのみち、それは大して重要ではなかった。二人の間には、理解の結びつきがあって、それは愛情や党派制よりも重要なことだった。「いつか暗闇のない場所で会おう」とかれは言った。どういう意味かはわからなかったが、いつか何らかのかたちでそれが実現することだけは知っていた。

テレスクリーンからの声が止まった。ラッパの合図が、はっきりと美しく、停滞した空気の中に漂いこんだ。声がたたみかけるように続く。

「静聴！ ご静聴を願います！ マラバー前線からたったいま速報が届きました。南インドの我が軍が輝かしい勝利をおさめたとのことです。いま報道したこの戦闘で、戦争の終結のめどがつくかもしれないとお伝えする許可がおりています。それでは速報です——」

悪い知らせがくるな、とウィンストンは思った。そしてその通り、すさまじい死傷者と囚人の数を含めたユーラシア軍殲滅の輝かしい描写に続いて、来週からチョコレートの配給が三十グラムから二十グラムに減らされるという発表がきた。

ウィンストンはまたゲップをした。ジンの酔いがさめかけていて、気が沈んでいる。テレスクリーンは——勝利を祝うためか、はたまた失われたチョコレートの記憶を埋没させようとしてのことか——「オセアニア、そは汝のもの」を大音響で流しはじめた。立ち上がって気をつけの姿勢をとるべきだった。でもいまいる位置では見られることはない。

「オセアニア、そは汝のもの」に続いてもっと軽い音楽となった。ウィンストンは窓辺に寄って、テレスクリーンには背中を向け続けた。相変わらず寒く晴れた日だ。どこか遠くでロケット弾が、鈍い反響するとどろきと共に炸裂した。現在では週に二十～三十発がロンドンに投下されている。

眼下の通りでは、破れたポスターを風がぱたぱたとはためかせ、「イングソック」の一語がけいれんのようにあらわれたり消えたりした。イングソックの聖なる原理。ニュースピーク、二重思考、過去の変動性。自分が海底の森林をさまよひ、化け物じみた世界で迷子になったが、その自分自身が怪物であるような気がした。ひとりぼっちだった。過去は死に、未来は想像できなかった。生きた人間がたった一人でも自分の味方であるという可能性がどれだけあるというのか。そして党の支配が永遠には続かないと言えるのだろうか？ それに対する答えのように、真理省の白い壁面にある三つのスローガンがこちらを向いている。

戦争は平和  
自由は隷属  
無知は力

ポケットから二十五セント玉を取り出した。そこにも、小さくはっきりした文字で、同じスローガンが掘られており、その硬貨の裏側にはビッグブラザーの顔が刻印されていた。硬貨からでもその目は人を見据えている。硬貨からも、切手からも、本の表紙からも、旗からも、ポスターからも、タバコの包装からも——あらゆるところから。いつも目がこ

ちらを監視し、声がこちらを包み込む。寝ても覚めても、働くときも食事のときも、屋外でも屋内でも、風呂の中でもベッドの中でも――逃れようがない。自分の頭蓋骨内部のほんの数立方センチ以外に、自分だけのものと言えるものはなかった。

太陽がめぐるって、真理省の無数の窓にはもう光が当たらなくなり、要塞の銃眼のように陰気に見えるようになっていた。巨大なピラミッド型を前にして心がひるんだ。強すぎる、襲撃できない。ロケット弾を千発うちこんでもつぶせないだろう。再び、自分がだれに向けて日記を書いているのか思索した。未来のために、過去のために――空想上のものかもしれない世界のために。そして目の前のそこに横たわるのは、市ではなく殲滅。日記は灰となり、自分は蒸気となる。自分の書いたものを読むのは思考警察だけで、その直後にこれは存在を消され、記憶からも消される。自分の痕跡すら残らず、匿名で紙にかきつけたことばですら物理的に生き残れないのに、どうやって未来に訴えかければいいのか。

テレスクリーンが十四時を告げた。十分でここを出なくては。仕事に十四時三十分までに戻らなくてはならない。

不思議なことに、時を告げるチャイムが勇気を取り戻させてくれた。自分は孤独な幽霊で、だれも決して聞くことのない真理をつぶやいているだけだ。でもつぶやいている限り、あるはっきりしない形で、連続性は失われない。人間の遺産を伝えるには、自分の主張を聞いてもらうことではなく、正気であることだ。テーブルに戻り、ペンをインクに浸すと、こう書いた。

未来または過去へ、思考が自由であり、人々がお互いにちがっていて、孤独に暮らしてはいない時代へ――真理が存在し、行われたことを取り消すことができない時代へ。

均質性の時代より、孤独の時代より、ビッグブラザーの時代より、二重思考の時代より――こんにちは！

おれはすでに死んでいる、とウィンストンは考えた。こうして自分の考えをまとめられるようになった今こそが、決定的な一歩を踏み出したときのように思えた。あらゆる行為の帰結はその行為自体に含まれている。ウィンストンはこう書いた：

思考犯罪は死をもたらすのではない。思考犯罪は死そのものなのだ。

自分が死人だと認識した以上、できるだけ生き延びることが重要となった。右手の指二本にインクの染みがついている。まさに墓穴を掘りそうな細部だ。省でかきまわっている狂信者（たぶん女だ：砂色の髪の小女か、創作部の黒髪女みたいなだれか）が、なぜウィンストンが昼食時間中にもものを書いていたのか、なぜ旧式のペンを使ったのか、何を書いていたのか、いぶかしみだすかもしれない――そして適切な部門に何かほのめかすかもしれない。洗面所に行って、ベトベトしたこげ茶色の石けんで慎重にインキをこすり落とした。その石けんは皮膚を紙ヤスリのように削るので、目下の目的にはぴったりだった。

日記は引き出しにしまった。隠そうとしてもまったく無駄だったが、その存在がばれたかどうかはわかるようにしておきたかった。ページのふちに髪の毛を置いておくのはすぐにばれてしまう。指先で、それとわかる白っぽいほこりをつまみ上げると、表紙の隅にふりかけておいた。本が動かされたら、こぼれ落ちるだろう。



## 第3章

ウィンストンは母親の夢を見ていた。

母親が消えたときは、確か十才か十一才だった。背が高く、彫像のようで、物静かで動きもおっとりしており、すばらしい金髪をしていた。父親はもっと漠然と、色黒でやせていて、いつもきちんと黒っぽい服を着ていて（ウィンストンは特に、父親の靴の底がとても薄かったのをおぼえている）、メガネをかけていたという記憶しかない。二人はたぶん、五十年代の初期の大粛正の中に飲み込まれてしまったのだろう。

目下の夢では、母親は自分よりはるか深い下の方にすわっていて、妹を抱いている。妹のことは、小さい弱々しい赤ん坊で、いつも静かで、大きい何でも見る目をしていたという以外は何も覚えていない。二人とも、こちらを見上げている。二人は何か地下の場所にいる——たとえば井戸の底、あるいはとても深い墓——でもそれは、すでにずっと下にあるのに、さらに下方に動き続けていた。沈む船のサロンにいて、暗くなる水を通してこちらを見上げている。サロンにはまだ空気はあるし、二人ともこちらが見えるしこっちも二人が見えるが、その間にも二人は沈み続け、次の瞬間にも永遠に二人を見えなくしてしまうはずの緑の水に沈んでゆく。こちらは光と空気の屋外にいるのに、二人は死へと吸い込まれ、そして二人が下にいるのは、まさにかれが上にいるためなのだった。こちらも、二人も、それを知っているし、それを知っているのが二人の顔から読み取れた。二人の表情にも心にも恨みはなく、こちらを生かすためには自分たちが死なねばならず、それが避けがたい物事の秩序の一部なのだという知識だけがある。

何が起きたのかはおぼえていないが、夢の中でかれは、母と妹の命が自分の命を救うために何らかの形で犠牲になったということを知っていた。それは夢の場面としての特徴を保ちつつ、知的な生活の連続であるような夢であり、目を覚ましたあとも目新しく価値あるものに思える事実や発想に気がつかせてくれるような夢だ。いまウィンストンがはっと気がついたのは、ほとんど三十年前の母親の死がの悲劇性や悲しさは、いまや不可能になっているということだ。悲劇は、まだプライバシーと愛と友情があり、家族がいちいち理由がなくてもお互いとともにあった、古代に属するものだった。母親の記憶が心をかきむしるのは、彼女が自分を愛するがために死んだからであり、そしてそのとき自分は幼すぎて身勝手に愛し返すことができず、そしていまは思い出せない何らかの形で、私的で改変不可能な忠誠の概念のために自らを犠牲にしたからなのだった。そうしたことは、現在では起こりえないのだ、とウィンストンは気がついた。今日では恐怖と憎悪と苦痛はあるが、感情の尊厳はなく、深く複雑な悲しみもない。このすべてが母と妹の大きな目の中に読み取れたようだが、その母と妹は何百尋も緑の水の中からこちらを見上げ、いまなお沈み続ける。

いきなりウィンストンは、短い弾力のある芝生に立っていた。夏の夕方、西日が地面に

きらめいている。いま目にしている風景はあまりにしょっちゅう夢に登場したので、それを現実の世界で見たことがあるのかどうか、完全には自信が持てなかった。起きているときの思考の中では、それを黄金の国と呼んでいた。古い、ウサギの穴だらけの牧草地で、踏み固められた道がうねうねと横切り、あちこちにモグラ塚がある。草原の向こう側に生い茂った茂みでは、榆の木の太枝がそよ風のなかでごくかすかに揺れており、葉は女の髪のように密なかたまりとなってそよいでいる。もう少し近いところには、視界からははずれているけれど、澄んだゆるやかな小川があり、デース\*1が柳の下の淀みで泳いでいる。

黒髪の女がその草原を横切ってこちらに向かってくる。ほとんど一動作で自分の服を破り捨てて、軽蔑したかのようにそれを横に投げ捨てた。女の肉体は白くなめらかだったが、それで欲望が喚起されることはなく、ウィンストンはほとんどそれを見なかったほどだ。その瞬間にかれを圧倒したのは、女が服を横に投げ捨てたときの身振りに対する賞賛だった。その優雅さとさりげなさは、一つの文化丸ごと、一つの思考体系まるごとを消し去るかのようで、ビッグブラザーと党と施行警察がすべて、腕のすばらしい一動作だけで無の中へと掃き出してしまえるかのようだった。これまた古代に属する身振りだった。ウィンストンは「シェイクスピア」と口にしながら目をさました。

テレスクリーンは耳をつんざくような笛を流しており、それが同じ音で三〇秒続いた。それはゼロ七十五時、オフィス労働者の起床時間だ。ウィンストンは無理矢理からだをベッドから引きずり出した――裸で、というのも外部党員たちは年間三千の衣服クーポンしかもらえず、パジャマの上下は六百するのだ――椅子の上に放り出してあった薄汚い袖無しアンダーシャツとショーツをつかんだ。身体躍動が三分で始まるのだ。次の瞬間、ほとんどいつも起きて直ぐにおそわれるすさまじいせきこみで、ウィンストンはからだを二つ折りにしていた。肺がほとんど空っぽになってしまったので、息を取り戻すには横になって、深呼吸を何度かしなくてはならなかった。咳き込んだために血管が膨張し、静脈瘤の潰瘍がまたかゆくなってきた。

「三〇から四〇のグループ！」と突き刺すような女性の声がわめいた。「三〇から四〇のグループ！ 位置について下さい！ 三〇から四〇！」

ウィンストンはテレスクリーンの前で飛び上がって直立した。スクリーンにはすでに、若そうな女性の姿が映っていた。やせてはいるが筋肉質で、チュニックと運動靴を履いている。

「腕の屈伸！」と彼女はわめいた。「わたしに拍子をあわせてください。いち、二、三、四！ さあ同志のみなさん、もっと元気よく！ いち、二、三、四！ いち、二、三、四！……」

咳の発作からの痛みでも、夢の印象が頭から完全に消えたわけではなかったし、体操のリズミカルな動きはそれを少し復活させた。身体躍動の最中に適切とされる、陰気な楽しみの表情を顔にまといつつ、機械的に腕を前後にふりまわす間、かれは記憶のぼんやりした幼年期を回想しようと苦闘していた。きわめてむずかしいことだった。五〇年代末より前のことはすべて薄れていた。参照できる外部の記録がないと、自分自身の人生の輪郭すら鮮明さを失う。ほぼまちがいがなく起きていないはずの重大事件が記憶にあたりするし、出来事の細部は覚えているのにその雰囲気がい思い出せなかったりするし、何一つ思い浮かばない長い空白の時期もある。当時はすべてがちがっていた。国の名前や、その地図上で

\*1 訳注：ウグイに似たコイの一種だそう。



の形すらちがっていた。たとえば、滑走路一号は、当時はそういう名前ではなかった。イギリスとかブリテンとか呼ばれていたはずだ。でもロンドンは、昔からロンドンだったことはかなり確かだった。

ウィンストンは自国が交戦中でなかった時代をはっきりとは思い出せないが、子供時代にはかなり長い平和の時期があったことは明らかだった。最も初期の思い出の一つは空襲だったが、だれもがそのときに驚いていたからだ。コルチェスターに原爆が落ちた時だったかもしれない。空襲そのものは覚えていないが、父親の手が自分の手をつかまえて、下へ、下へと地面の奥深いどこかへ引き連れ、ぐるぐると下るらせん階段が足の下で鳴り、あまりに足が疲れてきたのでベソをかきはじめて、途中で止まって休まなくてはならなかったのは覚えていた。母親は、そのゆっくりした夢見るような形で、ずっと遅れてついてきていた。赤ん坊だった妹を抱いている——それとも抱えていたのはただの毛布のかたまりだろうか。その時に妹が生まれていたかどうか、確信がはかった。やっと騒々しい混雑した場所に出てきたが、それは地下鉄の駅だった。

石敷きの床のいたるところに人々がすわりこみ、他の人たちは何段にも重なった金属の寝台にびっしりとすわっている。ウィンストンと両親は床に場所を見つけたが、近くには老人と老婆が寝台に並んで座っていた。老人は立派なダークスーツと、真っ白な髪から押し戻した感じの黒い布製帽子を身につけていた。顔は真っ赤で、目は青く涙で一杯だった。ジンのにおいがぶんぶんする。汗のかわりに肌からしみ出してくるようで、目から流れ落ちる涙も純粋なジンだと思えるくらいだった。でもちょっと酔ってはいても、その老人は本物の耐え難い悲しみに苦しんでいた。ウィンストンは子供ながらに、何か恐ろしいこと、何か許し難く、決して元に戻せないことがいま起きたのだと理解した。そして、それが何なのかわかったような気がした。老人の愛しただれか、小さい孫娘かもしれないが、それが殺されたのだ。数分ごとに老人はこう繰り返していた。

「あいつら信用しちゃんねえかったんだよ。そう言っただろうが、婆さん、え？ 信用したらこのざまだ。前から言った通り。あのクズども信用しちゃんねえかったんだよ」

でも信用しちゃんねえかったのがどのクズどもなのかは、ウィンストンはもう思い出せなかった。

その頃あたりから、戦争は文字通り不断に続いていたが、厳密に言えばそれはずっと同じ戦争というわけではなかった。子供時代の何ヶ月かにわたり、ロンドンそのものでも混乱した市街戦があったし、そのいくつかは鮮明に記憶にある。でもその期間の歴史全体をたどり、各時点でだれがだれと戦っていたのかを述べるのはまったく不可能だった。書かれた記録も口伝も、現在の相関図以外のことは一切触れていないからだ。たとえば現在の一九八四年だと（いまが本当に一九八四年ならだが）、オセアニアはユーラシアと交戦中で、イースタシアと同盟関係にある。この三勢力が、かつて一度でもちがった形で手を組んでいたということは、公的にも私的な会話でも決して認められることはなかった。実は、ウィンストンがよく知っている通り、オセアニアがイースタシアと交戦してユーラシアと同盟関係にあったのはほんの四年前のことだった。でもそれは、記憶が十分なコントロール下にないためにたまたま手元にあった、秘密の知識の断片でしかなかった。公式には、仲間の変更は一度も生じていない。オセアニアは目下、ユーラシアと交戦中である。したがってオセアニアは常にユーラシアと交戦していた。目下の敵は常に絶対的な悪であり、よってその相手との過去または未来の合意はまったく不可能であるということが導かれる。

恐ろしいのは、とウィンストンは苦痛とともに肩を無理矢理うしろに曲げながら（腰に手をあてて、上体をまわしているところで、この運動は背筋によいとされていた）一万回も繰り返したことを考えた——恐ろしいのは、そのすべてが真実かもしれないということだった。党が過去に手をつっこんで、このできごとやらあのできごとについて、それがまったく起きていないと言えるなら——それこそまさに、ただの拷問と死よりも恐ろしいことじゃないだろうか。

党は、オセアニアがユーラシアと同盟したことはないという。この自分、ウィンストン・スミスは、オセアニアがたった四年前にはユーラシアと同盟関係にあったことを知っている。でもその知識はどこに存在するのだろうか。自分自身の良心の中だけであり、それはどのみち間もなく消滅させられてしまうものだ。そして他のみんなが党の押しつけるウソを受け入れたら——すべての記録が同じお伽話を語っていたら——そのウソは歴史へと流れ込んで真実となる。「過去を支配する者は未来を支配する。現在を支配する者は過去を支配する」というのが党のスローガンだ。でも過去は、その性質上改変可能なものではあっても、改変されたことはない。現在真実であることは、はるか昔からはるか未来まで真実である。単純明快。必要なのは自分の記憶に対する果てしない勝利だけだ。「現実コントロール」と呼ばれている。新語法では「<sup>ニュースピーク</sup>二重思考<sup>ダブルシンク</sup>」だ。

「休め！」と女性指導員が、ちょっと優しくに言った。

ウィンストンは腕を脇にたらし、ゆっくりと肺を空気で満たした。頭は<sup>ダブルシンク</sup>二重思考の迷宮世界へとさまよっていった。知りつつ知らないこと、完全に正直であると意識しつつ、新潮に構築されたウソを語る。相互に相殺し合うような二つの意見を同時に持ち、それらが矛盾していると知りつつ両方を信じる。論理に対して論理を使い、道徳を否定しつつそれに依拠すること、民主主義は不可能だと信じつつ党が民主主義の守護者だと信じる。忘れることが必要なものはすべて忘れ、それが必要とされたときにそれを記憶に引き戻し、そしてすぐさま再び忘れ去ること。そして何よりも、この同じプロセスをこのプロセス自体に適用すること。それこそが究極の巧妙さだった。意識的に無意識を動員して、それから再び自分がたった今行った催眠術行為を意識から消し去ること。「<sup>ダブルシンク</sup>二重思考」という世界（訳注：原文 world. word の誤植か？）を理解することさえ、<sup>ダブルシンク</sup>二重思考を必要とする。

女性指導員が、また気をつけを命じた。「ではこんどは、つま先に手が届くか見てみましょう！」と熱心に言う。「では腰から曲げてみましょう、同志のみなさん。いっち、に！  
いっち、に！……」

ウィンストンはこの体操が大嫌いだった。かかとから尻まで痛みが走るし、最後にはまたもや咳の発作が引き起こされるのがおちだ。空想の持っていた多少の楽しみもこれで消えてしまった。過去は単に変えられたのではなく、破壊されたんだ、とウィンストンは考えた。だって自分の記憶以外に何の記録もなかったら、どんなに自明な事実であっても証明なんかできやしない。ビッグ・ブラザーのことを最初に耳にしたのがいつの年だったか思い出そうとしてみた。たぶん六〇年代だったはずだと思ったが、確実なことは何も言えなかった。党の歴史ではもちろん、ビッグ・ブラザーは革命のごく初期からその指導者であり守護者だった。その偉業はだんだんと時代をさかのぼり、いまやすでに伝説の四〇年代や三〇年代からすでに続くことになっていた。当時は変な円筒状の帽子をかぶった資本家たちが、まだロンドンの街路で大きな輝く自動車やガラス壁の馬車を乗り回していた時代だ。この伝説のどこまでが事実でどこまでが発明品なのかは知りようがなかった。ウィ

ンストンは、党そのものが誕生したのがいつの日だったかも思い出せなかった。一九六〇年以前にイングソックオールドスピークということばをきいたことがあるとは思わなかったが、旧語法での語形——つまり「イギリス社会主義」イングリッシュ・ソシアリズム——ではもっと以前からあったかもしれない。すべてが霧の中にとけこんでしまっている。確かに、確実なウソを指摘できることもある。たとえば、党の歴史書で主張されている、党が飛行機を発明したというのは真実ではない。飛行機は物心ついた頃から存在していた。でも、何も証明はできない。証拠はあったためしがない。全人生でたった一度だけ、歴史的事実のねつ造をまちがえようもなくはっきりと示す証拠を手にしたことがあった。そしてその時には——

「スミス！」とテレスクリーンから金切り声じみた声が叫んだ。「6079番 スミス・W！

そう、あなたです！ もっと身をかがめてください！ やればできるはずですよ。もっと気合いを入れて。もっと下まで！ そーうです、同志。さあ休め！ 全員です。こちらを見てください」

ウィンストンの全身に熱い汗が噴き出した。顔は完全な無表情のまま。決してうろたえを外に示さないこと！ 嫌悪を外に出さないこと！ 視線のちょっとしたふらつきでバレてしまいかねない。立って見つめる女性指導員は、腕を頭上にあげて——優雅にはいえないが、非常にきれいかつ効率よく——身をかがめて、指の第一関節を足の指の下に入れた。

「こーんなふうに、同志のみなさん！ こーんなふうにしてくださいね。もう一度見ていてくださいよ。わたしは三九歳で四人の子持ちなんですよ。さあ見てください」彼女はまた身をかがめた。「わたしのひざは曲がってませんよね。みなさんだって、やろうと思えばできるんです」と言いながら身を起こす。「四十五歳以下の人はだれでもつま先に手が届きます。わたしたちみんな、前線で戦う特権があるわけではありませんが、少なくとも健康でいようじゃありませんか。マラバー前線の兵士たちのことを考えてください！ 浮き要塞の水兵たちを！ あの人が耐えていることを考えてみましょう！ さあもう一度やってみましょう。はい、ずっとよくなりましたよ、同志。本当に上出来です」と彼女が元気づけるように語りかけたウィンストンは、思いっきり身をかがめて、数年ぶりにひざを曲げずにつま先に触れることができたのだった。



## 第4章

一日の仕事が始まったときに出る、テレスクリーンの近さすら放出を禁じ得ない深い無意識のため息とともに、ウィンストンは書き取り装置を引き寄せて、マウスピースのほこりをはらい、メガネをかけた。それから、仕事机の見後手にある気送管からすでに飛び出てきた、四つの小さな筒状の紙をほどき、クリップであわせて留めた。

小区画の壁には三つのくぼみがあった。一つは書き取り装置の右側にある、文書メッセージ用の小さな気送管だ。左には、新聞用のもっと大きな気送管。そして横の壁には、ウィンストンからすぐに手の届くところに、針金の格子で保護された大きな横長のスリットがあった。この最後のものは反古紙を捨てるためのものだ。似たようなスリットが、この建物中に何千、何万とあり、それも部屋ごとどこかあらゆる廊下にごく短い間隔で設置されていた。どういわけかそれは記憶穴と呼ばれていた。どんな文書でも、破壊されることになっていると知っていたら、あるいはそこに反古紙が転がっていたら、手近な記憶穴のフラップを上げてそこに捨てるのは反射的な行動となっていた。するとそれは温風の流りに運ばれて、どこか建物の裏に隠されている巨大な焼却炉へと向かうのだ。

ウィンストンは、丸められていたのをほどいた四枚の紙を検分した。それぞれ一、二行のメッセージが、省内で使われる短縮形の専門用語——ニュースピークではないが、かなりニュースピーク用語が使われている——で書かれていた。こう書かれている。

タイムス 17.3.84 bb 演説不適報告 アフリカ 修正

タイムス 19.12.83 予測 3 yp 83 4 四半期 ミスプリ 確認 最新号

タイムス 14.28.84 豊省 不適引用 チョコ 修正

タイムス 3.12.83 報告 bb 日令 二重プラス非良 参照 非人 全面改定 ファイル前上提

かすかな満足感と共にウィンストンは最後のメッセージを横に置いた。これはややこしく責任ある仕事なので最後に処理した方がいい。残り三つは定型作業だが、二番目は数字一覧をあさる面倒な作業になるだろう。

ウィンストンはテレスクリーンの「バックナンバー」をダイヤルし、『タイムス』の適切な号を要求した。ものの数分間で気送管から出てきた。受け取ったメッセージは、何らかの理由で改変、あるいは公式用語でいえば修正が必要となった、記事やニュースを指していた。たとえば三月一七日号の『タイムス』では、ビッグブラザーがその前日の演説で、南インド前線は静かなままだが北アフリカでユーラシアの攻勢が始まると予測していた。ところが実際にはユーラシア司令部は、南インドの攻勢を開始して、北アフリカでは動かなかった。したがってビッグブラザーの演説を書き直し、かれが実際に起こったことを予想したようにする必要が生じた。あるいはやはり『タイムス』の十二月十九日号で、

各種消費財の一九八三年第四四半期（同時に第九時三カ年計画における第六四半期）における産出量の公式予測を公表していた。今日の号は実際の産出量についての記述を含んでいたが、すべてのものについて、予測値は大幅にまちがっていたようだ。ウィンストンの仕事はもとの予測値を修正して、それが実際の値と一致するようにすることだ。第三のメッセージはといえば、これはものの数分で直せるごく単純なまちがいがだった。二月というほんの少し前の時点で、豊富省は一九八四年中にはチョコレートの配給量は減らさないと約束（公式用語では「分類的確言」）を発表した。実はウィンストンも知っているように、チョコレートの配給は三〇グラムだったのが、今週末には二〇グラムに減らされる予定だった。必要なのは単に、もとの約束のかわりに、四月のどこかで配給量を減らさざるを得ないという警告を入れればいだけだ。

ウィンストンはそれぞれのメッセージに対応し終わるとすぐに、話筆した訂正を該当する『タイムス』にクリップで留めて、気送管に送り込んだ。それから可能な限りもっとも無意識に近い動作で、もとのメッセージや自分が作ったメモなどをすべて丸めると、記憶穴に落とし込んで炎に燃やし尽くされるに任せた。

気送管が向かう見たこともない迷路で何が起きるのか、かれも詳しくは知らなかった。だが一般的なことは知っていた。ある号の『タイムス』で必要とされた訂正がまとめられてそろえられると、その号は印刷し直され、もとの号は破棄されて、修正済みの号がかわりにファイルに加えられる。この絶え間ない改変プロセスは新聞だけでなく、本や雑誌、パンフレット、ポスター、ちらし、映画、音声録音、マンガ、写真など——政治的、イデオロギー的に少しでも重要性を持つかもしれないあらゆる文献や記録すべて——に及んだ。毎日、毎分ごとに、過去は最新の状態に更新される。こうすれば、党の行ったあらゆる予想は、記録証拠に基づいて正しかったのだということが示される。どんなニュースだろうと意見表明だろうと、その時点のニーズにそぐわないものであれば、記録に残ることは認められなかった。歴史はすべて改変可能な羊皮紙であり、必要に応じていくらでもきれいに白紙に戻されて書き直されるのだった。この作業が行われてしまえば、いささかも偽造が行われたとは一切証明できなかった。記録局の最大の部門は、ウィンストンが働いている部門よりはるかに大きくて、そこでの人々の仕事は、すでに改訂されて破壊されるべき本や新聞などの文献を追跡し、集めることだった。政治的な同盟関係の変化やビッグブラザーが口走ったまちがった予言などが、何十回となく書き直された『タイムス』の号が、相変わらずもとの日付のままでファイルに並んでいる。本もまた何度もリコールされて書き直されたが、すべて何ら改変が行われたという記録なしに再発行される。ウィンストンが受け取り、処理が終わったらまちがいなくすぐに処分した文書指令でさえ、なんら偽造が行われるなどということを述べたりほめかしたりはしていなかった。常に述べられるのは、ミスやまちがい、ミスプリ、引用間違いなどであり、したがって正確さを保つために正す必要がある、ということだった。

だが実は、これは偽造ですらない、とかかれは豊富省の数字を改訂しつつ考えた。単に一つのでたらめを別のでたらめで置き換えるだけだ。自分が扱っている内容のほとんどは、現実世界とは何一つ結びついてはいなかった。真っ赤なウソに見られるほどの結びつきさえない。統計はもとの数字だろうと改訂後の数字だろうと、まったくの想像の産物であることにはかわりなかった。かなりの場合、自分が勝手に頭の中ででっちあげることになっていた。たとえば豊富省の予測では、その四半期のブーツ生産は一億四五〇〇万足ということになっていた。実際に生産は六二〇〇万足だという。だがウィンストンは予測値の書

き直しにあたり、予測値を五七〇〇万足に引き下げた。そうすれば、ノルマが十分以上に達成されたといういつもの主張が可能になるからだ。どのみに、六二〇〇万足というのは五七〇〇万足という数字よりも、あるいは一億四五〇〇万足という数字に比べても、事実に近いわけではなかった。おそらくブーツなどまったく作られていないのだろう。もっとありそうなこととして、だれもどれだけ生産されているかわかっていないし、まして気にもしていない。みんな知っているのは、紙の上ではどの四半期にも天文学的な数のブーツが作られているはずなのに、オセアニアの人々のおそらく半分くらいは裸足でうろついているということだ。そしてあらゆる記録された事実についても話は大きなり小なり同じだった。すべてはぼんやりした影の世界へとかき消えて、ついには今日が何月何日なのかもはっきりしなくなった。

ウィンストンは廊下の向こうを見た。向かいの小区画には、小柄で厳密そうな、あごの黒いティロツソンという男が一心に働いており、ひざにはたたんだ新聞がおかれ、口は話筆機のマウスピースにぐっと寄っている。自分の言うことを、自分とテレスクリーンとだけの秘密にしておこうという雰囲気だった。かれは顔をあげ、そしてそのめがねがウィンストンのほうに、敵意に満ちた一瞥を投げかけた。

ウィンストンはティロツソンをほとんど知らなかったし、かれが何の仕事で雇われているのか見当もつかなかった。記録局の人々は、そう気軽には自分の仕事の話をしな。長い窓のない廊下部屋には、二列に並んだ小区画で人々が果てしなく紙をかきかさいわせ、話筆機につぶやく声のうなりが響いていたが、毎日廊下を足早に行ったり来たり、あるいは二分憎悪で腕をふりまわしたりするところは見ているのに、名前すら知らない人物が何ダースもいた。自分の隣の小区画にいる、砂色の髪の女性は、一日中苦勞して、ひたすら報道から数年前に蒸発させられ、したがって元々存在しなかったとされる人々の名前を削除し続けているのだった。これはなかなかふさわしいことに思えた。彼女自身の夫も数年前に蒸発させられていたからだ。そして数区画離れたところにいる、おとなしい、手際の悪い、夢見る生き物はアンブルフォースという名で、毛だらけの耳と、韻や韻律に関する意外な才能を持っており、イデオロギー的に不適切となったが、何らかの理由で詩集に遺しておくべき詩の歪曲版——決定版と呼ばれていたが——を作っているのだった。そしてこの廊下部屋は、労働者五十人かそこらだが、記録局という巨大で複雑な組織の中で、一つの課でしかなく、いわば一つの細胞でしかない。向こう、階上、階下には、群衆のような労働者たちが、想像もつかないほど多様な仕事に従事している。副編集長をそなえた印刷工房、タイポグラフィの専門家や、写真偽造のための一大設備を備えたスタジオ。テレ番組部は、エンジニアやプロデューサーがいて、さらに声色を真似るのがうまいかどうかで特別に選ばれた役者群がいた。リコールされるべき本や雑誌の一覧をひたすら作るのが仕事の司書軍団もいた。訂正された文書が保存される広大な保管庫があり、もとのコピーを破壊するための、隠れた巨大な焼却炉があった。そしてどこかは知らないが、まったく匿名で、この作業全体を調整して、方針を決める指導脳がいるはずだった。その方針によって、過去のこの部分は保存するがあの部分は偽造し、他の部分は消去することが必要となるわけだ。

そして記録局は結局のところ、それ自体が真理省の一部局でしかなかった。真理省の主な仕事は過去を再構築することではなく、オセアニア市民に新聞、映画、教科書、テレスクリーン番組、芝居、小説などを提供することだ——ありとあらゆる情報、指令、娯楽、銅像からスローガンまで、叙情詩から生物学の論文、そして子供の書き取り帳からニュー

スピークの辞書まで。そして省は党の多種多様なニーズを満たすだけでなく、プロレタリアートのためにその活動を丸ごともっと低いレベルでも繰り返さなくてはならなかった。一連のまったく別個の部局が、プロレタリア向けの文学や音楽、ドラマ、娯楽などを扱っていた。ここで作られるのは、スポーツと犯罪と星占いしか載っていないクズのような新聞、扇情的な安っぽい三文小説、セックスまみれの映画、そして多様化機と呼ばれる特殊な万華鏡により機械的に作曲される感傷的な歌だ。最低の種類のパルノ生産に従事する専門の課——ニュースピークではパルノ<sup>セック</sup>課と呼ばれる——すらあって、その産物は封印した封筒に入って送り出され、その作成に従事する人々以外の党員は、見るのが一切許されていなかった。

ウィンストンの作業中に、メッセージが三つ気送管から出てきたが、ごく単純なことだったので、二分憎悪で中断される前にそれらは片付けてしまった。憎悪が終わると、かれは自分の小区画に戻り、棚からニュースピーク辞書を取って、話筆機を一方に押しやり、めがねをふいて腰を落ち着け、午前中の大仕事に取りかかった。

ウィンストンの人生最大の喜びは仕事だった。そのほとんどは退屈な定型作業だったが、中には実にむずかしくて複雑で、数学問題の深みにはまったときのように没頭してしまうような仕事もあった——きわめて繊細な偽造で、イングソックの原理に関する知識と、党が何を言ってほしいかという推測以外は何も導いてくれるものがないようなものだ。ウィンストンはこの手のものが得意だった。ときどき、『タイムス』のトップ記事の修正を任されることもあって、それは丸ごとニュースピークで書かれているのだった。かれはさっき横にどけておいたメッセージをほどいた。こうある：

タイムス 3.12.83 報告 bb 日令 二重プラス非良 不人参照 全面改定 ファイル前  
上提

オールドスピーク（または通常英語）ではこういうことになるだろうか：

タイムス 1983年12月3日号の、ビッグブラザーの日次指令報告はきわめて不満足なものであり、非在人物への言及がある。完全に書き直したうえでファイリングの前に上司に草稿を提出のこと。

ウィンストンは問題の記事を通読した。ビッグブラザーの日次指令は、どうやら主にF F C Cなる組織の仕事ぶりをほめるのに費やされていたようだ。これは浮上要塞の水兵たちに、タバコなどの嗜好物を提供する組織だ。ある同志ウィザースなる人物、党中枢の需要人物が、中でも特筆すべき存在として選り抜かれ、二等傑出勲章を与えられたのだった。

三ヶ月後、F F C Cは何ら理由も示されないまま、突然解体された。おそらくウィザースやその仲間は解職されたと推測されるが、新聞やテレスクリーンでそれについての報道はまったくなかった。これはありがちなことだ。政治違反者たちが裁判にかけられたり、公式に糾弾されることすら滅多になかったからだ。何千もの人がからみ、裏切り者や思考犯罪者たちが自分の犯罪について惨めな自白をしてから処刑される、公開裁判を伴うような大粛正は、特別な見せ物で数年に一度くらいしか起きない。もっと普通の場合には、党の不興を買った人々はあっさり消滅し、二度と行方が知れることはなかった。かれらの身に何が起きたのか、まったく見当もつかなかった。一部の場合には、死んでさえいないのかもしれない。ウィンストンの個人的知り合い（両親は含めない）も三〇人ほどこれまでに姿を消していた。



ウィンストンは紙クリップでそっと鼻をつついた。通路を挟んだ小区画では同志ティロツソンが、相変わらず何かを隠すかのように話筆機の上にかがみ込んでいる。一瞬その顔があがった。またもや敵意に満ちためがねの視線。ウィンストンは、ティロツソンが自分と同じ仕事に従事しているのではないかと思った。これほどに面倒な作業は、たった一人に任されることは決してない。一方、それを委員会にかけたら、偽造が行われていることを公式に認めることになる。おそらくは一ダースもの人々が、ビッグブラザーの本当の発言について、競合するバージョンを作る作業にかかっているのではないか。そして党中枢のマスター頭脳が、そのどれかのバージョンを選び、再編集して、必要となる相互参照プロセスを開始し、それから選ばれたウソが永続記録へとまわされて真実となる。

ウィンストンはなぜウィザースが解職されたか知らなかった。汚職のためか無能のためか。それともビッグブラザーが、人気の出すぎた部下を始末しただけかもしれない。あるいはウィザースかその近くの人物が、異端傾向の嫌疑をかけられたのかもしれない。あるいは——これがいちばんありそうだったが——肅正や蒸発が政府にとって不可欠なメカニズムだからこれが起きただけなのかもしれない。唯一本物のヒントは「不人参照」ということばにあった。これはウィザースがすでに死んでいることを示唆している。逮捕されただけでは、死んだとは限らない。とくには釈放されて、一年から二年も自由にしていたあげくに処刑されることもあった。ごくまれに、とっくの昔に死んだと思っていた人物が、何か公開裁判で幽霊のように再登場し、何百という人々を告発する証言をしてから消滅することもあった。だがウィザースはすでに不人になっていた。かれは存在しなかった。存在したこともなかった。ウィンストンは、単にビッグブラザーの演説の論調を逆転させるだけでは不十分だと考えた。もとの話題とまるっきり無関係な内容に変えた方がいい。

いつもの裏切り者や思考犯罪者に対する糾弾に仕立ててもいいが、それはちょっとあまりに見え透いている。一方で前線での勝利や第九次三カ年計画での過剰生産による勝利をでっちあげるのには、記録をあまりにややこしくしてしまうだろう。必要なのはまったくのおとぎ話だった。突然頭の中に、すっかり仕上がった形で、同志オギルヴィなる人物の姿が飛び込んできた。かれは最近戦闘で、英雄的な状況で死んだのだった。ときどきビッグブラザーは、日次指令を慎ましいたたき上げの党員の記念にあてることがあった。その人物の生と死が、人々の従うべき価値あるお手本として讃えられるのだ。この日、かれは同志オギルヴィを記念したのだ。もちろん同志オギルヴィなる人物が存在しないのは事実だが、印刷物何行かと写真何枚かを偽造すれば、すぐに実在したことになる。

ウィンストンはしばし考え、話筆機を引き寄せると、ビッグブラザーのおなじみの文体で口述を始めた。軍隊式でもありながら銜学的でもあり、そして質問を投げかけてすぐにそれに自分で答えるという手口のため（「この事実からどんな教訓が学べるだろうか、同志諸君？ その教訓とは」云々かんぬん）、真似しやすい。

三歳にして同志オギルヴィは、太鼓とサブマシンガンとヘリコプター模型以外のあらゆるおもちゃを拒んだのだった。六歳にして——特別に規則を曲げることで規定より一歳早く——スパイ団に入った。九歳にして部隊長となった。十一歳のとき、叔父の会話を盗み聞きして犯罪傾向があると思えたので、かれを思考警察に告発した。十七歳で青年反セックス連盟の地区組織長となった。十九歳のときに設計した手榴弾は平和省に採用され、最初の試験のときには一発で三十一人のユーラシア人囚人たちを殺した。二十三歳でかれは、作戦行動中に絶命した。重要な指令を携えてインド洋上空を飛行中に、敵のジェット機に追跡されたかれは、機関銃を重石にして飛行機から海中に飛び込み、指令も

ろとも海の藻屑と消えた——この末路を考えると、羨望の念を感じずにいるのは不可能だ、とビッグブラザーは述べた。ビッグブラザーは同志オグリヴィの人生の純粋さと一途さについていくつか言葉を足した。かれは完全に性を拒み、たばこも吸わず、一日一時間ずつジムで過ごす以外に娯楽は持たず、結婚と家族育成が一日二十四時間の任務への献身とは相容れないという信念の元、生涯独身の誓いをたてていた。かれが話す内容はイングソックの原理のみであり、人生の目的は敵ユーラシアの妥当と、スパイ、妨害工作者、思考犯罪者やその他裏切り者たちのあぶり出しだけだった。

ウィンストンは、同志オギルヴィに傑出勲章を授与すべきか内心で議論した。最終的には、それはやめておいた。無用な相互参照作業が増えるだけだからだ。

もう一度かれは、向かいの小区画のライバルを一瞥した。ティロツソンがまちがいなく自分と同じ作業に没頭しているのだ、という確信がなぜかした。最終的にだれのバージョンが採用されるかは知るよしもないが、ウィンストンはそれが自分ものであるはずだという深い自信を抱いた。一時間前は想像もしたことのなかった同志オグリヴィは、いまや事実となった。死人は創れるのに生者は創れないというのは、ちょっと不思議な気がした。現在には存在したことのなかった同志オグリヴィは、いまや過去に存在し、ひとたび偽造作業が忘れ去られれば、かれはシャルルマーニュやユリウス・カエサルと同じくらい権威をもって、同じ証拠に基づいて、存在したことになるのだ。

## 第5章

地下深くにある、天井の低い食堂で、昼食の行列がゆっくりよろよろと前進していった。部屋はすでになんまり満杯で、耳がつぶれそうなほどうるさかった。カウンターの格子からはシチューの湯気が絶えず流れ出し、そこには酸っぱい金属臭があったが、勝利ジンの臭いを打ち消すほどのものではなかった。部屋の奥には小さなバー、といってもただの壁の穴だが、そこからジンが大きなグラス一杯十セントで買えた。

「ちょうど探してたところだ」とウィンストンの背後から声がした。

振り向くと、調査局で働く友人のサイムだった。「友人」というのは必ずしも適切なことばではないかもしれない。最近では友人なんかおらず、同志がいるだけだ。だが同志の中には、一緒にいると他の同志よりは心地よい人物がいた。サイムは文献学者で、ニュースピークの専門家だ。実はかれは、ニュースピーク辞典第十一版の編纂に従事している専門家の第軍勢の一人なのだった。かなりのチビで、ウィンストンより背が低く、黒髪と飛び出したような大きな目をしていて、それが哀れみと嘲笑を同時にたたえており、話しかけているときにはこちらの顔を間近に観察するかのようだった。

「カミソリの刃を持ってないかと思ってね」とサイム。

「一枚もないよ!」とウィンストンは、ある種の後ろめたさからくる性急さで答えた。「いたる所探し回ったよ。もう存在しなくなってるんだ」

みんなカミソリの刃がないか人に聞いて回っている。実はウィンストンは、未使用のものを二枚ため込んでいた。過去何ヶ月も、カミソリが大欠乏状態だったのだ。党の店はいつも何かしら切らしているものがあつた。あるときはボタン、あるときは繕い用の毛糸、あるときは靴紐。いまはそれがカミソリの刃なのだ。手に入れようと思ったら、多少なりとも見込みがあるとすれば「フリー」マーケットでおおむねこっそりと探し回るしかない。

「同じ刃をもう六週間も使ってるんだ」とウィンストンは、ウソを言った。

行列がまたじわりと前進した。それが止まると、かれは振り返ってサイムとまた向かい合った。二人とも、カウンターの端の山からベトベトの金属トレイを取った。

「昨日、囚人たちの絞首刑を見に行っただかい?」とサイム。

「仕事があつたんだよ。映画で見るんじゃないかと思うぜ」とウィンストンは無関心を装って言った。

「実物を見るよりはるかに劣るな」とサイム。

かれのからかうような目がウィンストンの顔を値踏みした。その目はこう言っているようだった。「おまえのことはわかってるぞ。おまえなんかお見通しだ。おまえが囚人たちの絞首刑を見に行かなかつた理由はよく知ってるとも」。知的な面で、サイムは反吐が出るほどの主流派だった。かれは敵の村へのヘリコプター襲撃や、思考犯罪者の裁判や自白、愛情省の監獄での処刑などに、不快なほど大喜びして満足を示すのだった。かれに話

しかけるのは、そうした話題から話をそらして、できることならニュースピークの詳細に没頭させるのが主眼だった。この話であれば、かれは権威だったしおもしろかった。ウィンストンはちょっと顔をそむけて、その大きな黒い目の検分を避けた。

「なかなかの絞首刑だったんだが」とサイムは回想するように言った。「でも足を縛りあわせると台無しだと思うんだな。足をばたばたさせるのが見たいよ。そして何よりも、最後に舌がだらんと出てきて、それが青いんだ——それもかなり真っ青。そういう細部に魅力を感じるんだ」

「次どうぞ！」と、おたまを持った白エプロン姿のプロレが叫んだ。

ウィンストンとサイムはトレーを格子の下に置いた。それぞれにすばやく規定昼食がどしんと載せられた——ピンク色がかった灰色のシチュー 入りの金属製小皿、パンのかたまり、四角いチーズ、ミルクなしの勝利コーヒー入りコップ、サッカリンが一錠。

「あそこに空きテーブルがあるぜ、テレスクリーンの下のところ。途中でジンをもらってこよう」とサイム。

ジンは取っ手のない瀬戸物製のマグで支給されていた。二人は混雑した部屋の中を縫って横切り、上が金属製のテーブルの上に、トレーの上のものを移した。テーブルの片隅にはだれかがシチューをこぼしたのがたまっている。醜い液状の汚物で、ゲロみたいに見える。ウィンストンはジンのマグを手に取り、勇気をかき集めるために一瞬動きを止めて、油くさい液体を一気に飲み干した。目をしばたいて涙を払うと、急に腹が減っているのに気がついた。かれはスプーンでシチューを掻き込みはじめた。それはおおむねどろどろした液体の中に、スポンジ状のピンクがかった四角いものが入っていて、たぶん調理した肉なのだろう。二人とも、金属小皿を空にするまで一言も口をきかなかった。ウィンストンの左後方のテーブルでは、だれかが早口で絶え間なくしゃべっており、そのきつい口調はほとんどアヒルの鳴き声のようで、それが部屋全体の喧噪を突き破って聞こえてくる。

「辞書はどんな具合？」ウィンストンは騒音に負けないよう声を張り上げた。

「ぼちぼち。形容詞にかかったところ。すばらしいぜ」

サイムはニュースピークの話になったとたん、顔つきが明るくなった。金属小皿を脇に押しやり、パンの固まりを繊細な片手に、チーズをもう片方の手に取ると、テーブル越しに身を乗り出して、怒鳴らなくても話ができるようにした。

「第十一版は決定版なんだ。言語を最終形に仕立ててる——他のだれもこれ以外の言葉をしゃべらなくなったときの形なんだよ。おれたちの仕事が完成したら、君みたいな人はそれを最初っから学び直さないとダメだ。敢えて言うが、きみはおれたちの主な仕事は新語の発明だと思ってるだろう。だが大まちがい！ おれたちは言葉を破壊してるんだよ——それも大量に、毎日何百もね。言語を骨までそぎ落とす。十一版には、2050年までに古くなるような単語は一語たりとも入ってない」

サイムは飢えたようにパンをかじると何口か飲み込み、術学者にも似た熱意で話を続けた。その細く陰気な顔が活気づき、目はもはやバカにしたような表情をなくして、ほとんど夢見のような表情になっている。

「何とも美しいんだな、この言葉の破壊ってやつは。もちろん大量に始末されるのは動詞や形容詞あんだが、処分できる名詞だって何百もある。同義語だけじゃない。反対語だってある。だって、何か別の言葉の単なる反対語なんて、存在が正当化できるかね？ 言葉はそれ自身の中にその反対語を含んでいる。たとえば「良い」を考えよう。「良い」という言葉があるのなら、「悪い」なんて言葉がなんで要るね？ 『非良い』でも十分に用

---

が足りる——いや、むしろこのほうがいい。こっちはずばり反対のことばだけれど、『悪い』だとそうはいかないから。あるいはまた、『良い』の強調版がほしいなら、『すばらしい』『見事』とかその他あれこれ、漠然とした役立たずなことばをあれこれ抱えているのがまともと言えるか？『プラス良い』でその意味はカバーできる。あるいはもっと強いものが欲しいのなら『二重プラス良い』でいい。もちろん、いまの形式はすでに使われているけれど、ニュースピークの最終版ではそれ以外のものはなくなる。



## 第 II 部





## 第 III 部

